



“蜷川マジック”によって色鮮やかに変身した、124年の歴史を誇る道後温泉本館。

…
 実に4年ぶりとなるアートの大祭。
 2019年2月28日(木)まで開催中。

時

間は4年前に遡る。2014(平成26)年、道後温泉本館が改築120周年の大遷暦を迎えたことを記念して、松山市内では初となる大型アートイベント「道後オンセナート2014」が開催された。参加アーティストは、草間彌生や荒木経惟など20数名。温泉の知名度や人気ランキングで常に上位に入る道後温泉だが、宿泊客は年間120万人をピークに、近年は約80万人にまで落ち込んでいた。地元では「何かをしなければ」という気運が高まり、大遷暦を機会に「アートによるにぎ

わい創出”を目指す試みを実施することになったのだ。

古事記にも登場する道後温泉は、約3000年の歴史を持つ「日本最古の温泉」と言われる。重要文化財に指定された道後温泉本館の文化的価値も高い。そんな歴史的遺産と最先端のアートを融合させた道後オンセナート2014はメインターゲットとした「流行に敏感な女性等」からの支持を集め、宿泊客数が前年比で108%を超えるなど成功裡に幕を閉じた。ちなみにこの年は、四国八十八ヶ所霊場開創1200年、瀬

戸内海国立公園指定80周年でもあり、四国エリアの注目度が高まっていたが、それを差し引いてもかなりの経済効果があったと言えるだろう。

地方で実施される多くのアートイベントは、東京の広告代理店や企画会社に丸投げされることが多い。しかし、道後の場合は違った。自治体と旅館協同組合、商店街振興組合や地元企業などの民間が手を携え、しかも老若男女がそれぞれの立場で運営に関わり、イベントを成功に導いたのだ。効果の見えにくいアートを取り入れることについては賛否両論があった。ただ、だからこそその両派の間で多数の前向きな議論が生まれ、関わる人たちがより真剣にこの事業に取り組めたのかもしれない。

2014年の開催では、温泉という地域資源、松山市の温暖な気候などに「アート」という新しい魅力が組み合わさり、多くの観光客や市民で道後がにぎわった。同様の取り組みは、「蜷川実花 × 道後温泉 道後アート2015」、「街歩き旅ノ介 道後温泉の巻 山口晃 道後アート2016」に引き継がれ、さらに昨年9月のプレオープンからは、4年ぶりとなる道後オンセナートとして展開されている。そして4月14日、このイベントはグラッドオープンを迎える。「道後オンセナート2018」のコンセプトテーマは2014年に引き続き、「アートにのぼせる温泉アートエンターテイメント」。『のぼせる』とは、「夢中になる」ことだ。道後で展開されるアートは一部の人々に与えられる「特別なもの」ではなく、自由に感じられる、鑑賞できる、ごく身近なもの。そんな道後のアートにぜひ『のぼせて』ほしい。